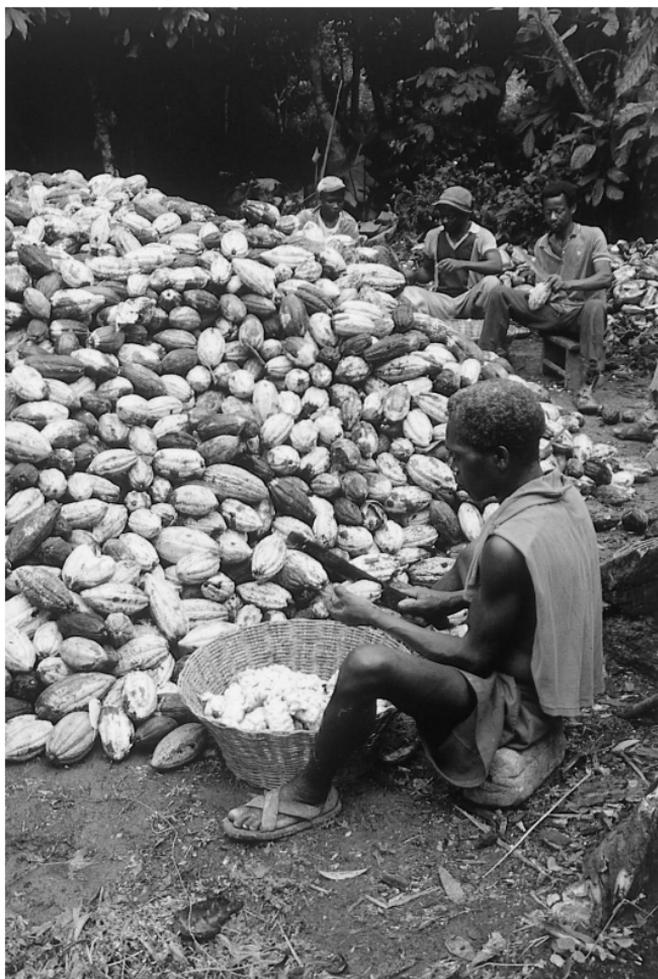


第2章 イギリス支配下のゴールドコースト



20世紀に入って急速に拡大したカカオ生産は、植民地ゴールドコーストの経済を支える重要な産業となった。またこのカカオは、ほとんどがアフリカ人の小規模生産者によって生産されている。写真はカカオの収穫作業。

1 植民地下のアサンテ王国

「黄金の椅子」その後

一九〇〇年のイギリス軍とアサンテ王国との戦争の際に、アサンテ王国の象徴である「黄金の椅子」は秘密の場所の地中に隠され、その所在を知るものはほんの少数だけであった。ところが一九二〇年になって、この「黄金の椅子」が地上に姿をあらわすこととなった。当時のイギリスはゴールドコースト南部のインフラ整備を進めており、その道路建設のルートが偶然にも「黄金の椅子」の隠し場所の上を通ることとなったのである。

この隠し場所を知っていた少数のアサンテ人は、急いで「黄金の椅子」を掘り出して別の場所へ移動させた。ところがこの過程で「黄金の椅子」の保管を担当していた人物が、椅子の装飾品を取り外してこっそり売却しようとしたことが発覚した。この窃盗に関係したアサンテ人一四人は、植民地政府によってすぐに拘束された。当時の植民地政府は、事件の容疑者の裁判を伝統首長たちにゆだね、クマシの伝統首長評議会がその裁判を担った。アサンテ人にとって、「黄金の椅子」に対する冒涇は殺人以上の大罪である。伝統首長

図6 植民地ゴールドコースト
(1930年)



評議会は、当然のごとく容疑者に死刑を申し渡した。しかし植民地政府はこの決定を覆し、容疑者を終身国外流刑に処した。植民地統治下のアサンテ王国において、伝統首長が極刑を言い渡すことは許されていなかった。アサンテ王国に対する最大の罪を犯した人物をアサンテ王国の法に基づいて処罰することは、イギリス統治下ではできなかったのである。

一方、植民地政府は「黄金の椅子」が植民地内の治安を乱す目的に使用されないことを条件に、「椅子」自体の植民地政府への引き渡しを求めない決定をした。こうしてアサンテ王国の繁栄と統一の象徴である「黄金の椅子」は、皮肉なことに一部アサンテ人による冒流事件とその後屈辱的な裁判を経て、アサンテ人自身の手によって安全に保管されることとなった。

アサンテ王の帰還

「黄金の椅子」が日の目を見ることになった時期と同じころ、ゴール
ドコースト国内では、セイシェル諸島に追放されていたアサンテ王
ブレンペー一世の帰国を求める声も高まっていた。当時は、対アサンテ戦争の終結からす
でに二〇年以上が経過しており、宗主国イギリスにとってアサンテ王国は軍事的脅威では
なくなっていた。逆に金採掘やカカオ生産の活発化により、アサンテ王国地域は植民地経
済の中心地となりつつあった。このような時代変化を背景に植民地政府は一九二四年、ブ
レンペー一世が王としてではなく、「一市民」としてアサンテ王国に帰国することを承認し
た。

タコラディ港に到着したブレンペー一世は鉄道でクマシに向かったが、歓迎する群衆を
避けるためにクマシ手前で列車を降り、車に乗り換えてクマシ入りした。クマシでは歓迎
の行き過ぎによる治安悪化を懸念して、酒類の販売が一週間禁止され、集会も禁止され
たという。「一市民」として帰国したブレンペー一世は当初、「王」として振舞うことを慎重
に避けていた。しかし一九二六年には植民地政府の承認を経て、正式にクマシの王として
再度即位することとなった。

コラム 4

現在のアサンテ王

現在のアサンテ王であるオトゥンフオオセイイトウトウ二世は、前王の死にともなつて一九九九年に即位した。一九五〇年生まれの前王はガーナ国内で教育を受けた後、一九七三年からロンドンで会計学や行政学を学んだ。大学卒業後はカナダやイギリスでビジネスマンとしてのキャリアを積み、一九八九年にガーナに帰国してからは自ら会社を興して鉱山用機械の輸入事業をおこなっていた。また彼はイギリス国教会の信徒でもある。「アフリカの王国の指導者」というとその伝統的側面が強調されがちだが、実際のアサンテ王は実社会での経験と海外での生活経験が豊富な、きわめて現代的な人物である。

2 植民地経済の発展

鉱山採掘の活発化

「ゴールドコースト」の名のとおり、ヨーロッパ人の到来以前から金
の採掘は国内の発展を支える重要な経済活動であった。植民地期に
はいると、近代的な採掘技術の導入により金の採掘が一段と活発化するとともに、マンガ
ン、ダイヤモンド、ボーキサイト
の鉱脈も発見されてヨーロッパ企業に
よる鉱山採掘が本格化した。これら
の鉱脈はゴールドコースト南部に集
中しており、多くの男性労働力が採
掘事業に吸収されていった。

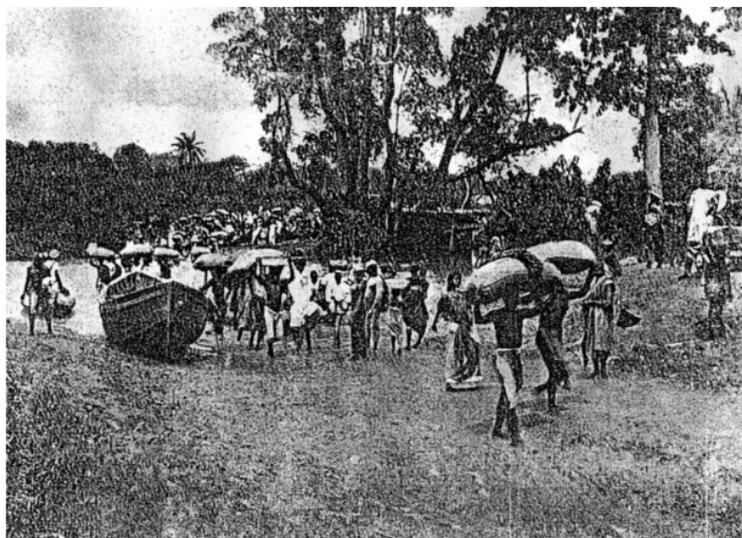
カカオ生産の活発化

チヨコレー
トの商品名
にもなっているほどガーナのカカオ

図7 カカオ生産地帯の拡大方向



第2章 イギリス支配下のゴールドコースト



写真③ カカオを港へ運ぶ人の隊列。道路や鉄道が未発達だった
当時は、カカオはすべて人力で港まで運ばれた。

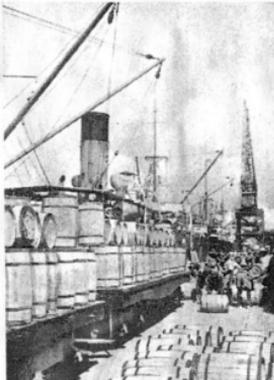
生産は有名だが、このカカオ生産が本格的に開始されたのも植民地期のことだった。ゴールドコーストでカカオ生産を最初に試みたのが誰かについては諸説あるが、ガーナ国内でよく知られているのは、テテクワシという人物にまつわるものである。それによると、首都アクラに近いアクアピン丘陵のマンボンという村で鍛冶屋を営んでいたテテクワシが、出稼ぎ先のフェルナンドポール島からカカオの種を持ち帰り、一八七九ころに地元での栽培に成功したのが始まりであるという。その後カカオ生産地域はゴールドコースト南部で急速に拡大し（図7）、一九一一年には生産量が四万トを超えて、

交通網の拡大

鉸山採掘やカカオ生産に代表される植民地期の経済発展は、この時期に急速に発達した交通網に支えられていた。当時の植民地政府は国内の交

ゴールドコーストは世界最大のカカオ生産国となった(写真③)。

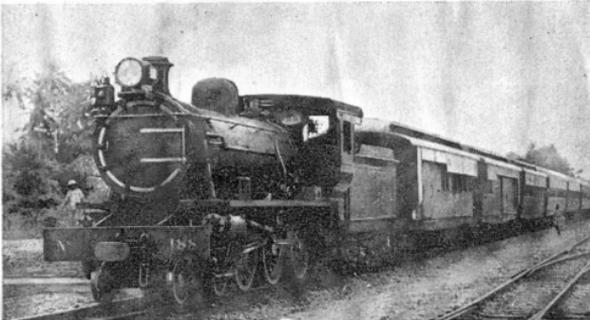
The
GATEWAY
to
AFRICA'S
RICHEST MINING
and AGRICULTURAL
AREAS



TAKORADI HARBOUR
QUICK DESPATCH

Consign via
TAKORADI and G.C.R.
RELIABLE TRANSPORT
at REASONABLE RATES

Tariffs on application to
The CROWN AGENTS for the COLONIES, 4 MILLBANK S.W.1
or the TRAFFIC MANAGER, G.C.R., TAKORADI



GOLD COAST RAILWAY || DAILY SERVICE

写真④ 植民地政府発行のハンドブック(1937年)に掲載された、タコラディ港とゴールドコースト鉄道の広告。「アフリカで最も豊かな鉸業・農業地帯への入り口」とうたっている。

通網の整備に特に力を入れており、鉄道と道路の建設を急ピッチで進めていた。例えば主要な鉱山を結ぶセコンディウムマシ間の鉄道は一九〇五年に完成しており、アクラウムマシ間の鉄道も一九二三年には開通した(写真④)。他方、車両が通行可能な道路は一九一四年の時点では一部にしか存在しかなかったが、一〇年後の一九二四年には全土に拡大していった。道路網の整備とともに輸送用トラックの輸入も活発化し、アクラでは一九二一年の時点ですでに五八六台のトラックが存在していたという⁽¹⁾。このような交通網の整備は、力才生産の拡大や鉱山開発の活発化と時期を同じくして進んでいった。

3 間接統治

伝統首長と間接統治

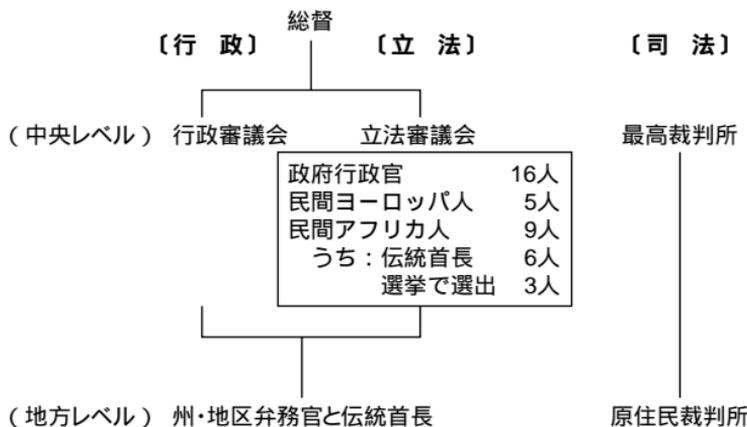
イギリスによるゴールドコーストの植民地支配は、国内の伝統首長が持っていた権力を最大限に利用する間接統治によっておこなわれた。植民地ゴールドコーストの統治者は総督であり、この下に行政審議会と立法審議会が設置されてそれぞれ行政と立法を担当した。ただし地方統治に関しては各地の伝統首

長に一定の権限が与えられ、各伝統首長は総督の許可を得て各地域で条例を制定することが許されていた。同じく司法に関しても、首都アクラに最高裁判所が設置されて国内の司法を統括していたが、軽微な裁判に関しては各地方の伝統首長が中心となった「原住民裁判所」での審判が許されていた(図8)。

このように伝統首長は植民地の統治機構の中で重要な役割を果たしていたが、彼らの権力乱用に際してはゴールドコースト総督が伝統首長の地位を剥奪する権利が認められていた。

また植民地政府は一九二六年から、立法審議会のメンバーのうち六人を、ゴールドコースト直轄領の伝統首長たちが組織する州評議会から選出した。立法審議会は総勢三〇人で構成され、うち民間人は一四人で、残りの一六人は総督を含む植民地政府の官

図8 植民地ゴールドコーストの統治機構(1926年)



僚が占めていた。また一四人の民間人枠のうち五人はヨーロッパ人に割り当てられ、アフリカ人枠は九人であった。この九人のうち六人が伝統首長の中から選ばれたわけである。残る三人のアフリカ人は、アクラ、ケープコースト、セコンディの三都市から選挙で選出されることとなった。アシャンティおよび北部領土の代表は、一九四六年になるまで立法審議会に参加していなかった。

オフォリ・アタ

では植民地統治に重要な役割を果たした伝統首長とは、いったいどのような人物たちだったのだろうか。この時代の代表的な伝統首長の一人で、国内で大きな影響力を持っていたアチム・アブアクワの王、オフォリ・アタの例を少し詳しく見てみよう²⁾（写真⑤）。アチム・アブアクワの位置は本章冒頭の図6参照。オフォリ・アタは一八八一年、王族の母と宮廷楽団員の父の間に生まれた。八歳の時に母を亡くし、その後はキリスト教化した父の影響でミッション系の学校で十八歳まで教育を受けた。英語の読み書きに堪能な彼は、その能力を生かしてアクラの著名な法律家のもとで働いた後、一九〇〇年のヤー・アサントワ戦争の時にはイギリス側の兵士として対アサント戦争に従軍するという経験もしている。その後は植民地政府の税関事務所での職を得たが、後にその英語力が買われて総督府での勤務も経験した。さらに国内で操業するヨ



写真⑤ アチム＝アブアクワの王、ナナ・サー・オフォリ＝アタ（1927年）。ガーナの伝統首長が持つ「ナナ」の称号と、イギリスから与えられた「サー」の称号の両方を有し、植民地政府に大きな影響力を持っていた。

そして一九二二年、三十一歳の若さでアチム＝アブアクワ国王に即位し、その後一九四三年に亡くなるまで王位にあった。この間彼は、一九一六年から植民地立法審議会のメンバーを務めて植民地政府の運営に大きな影響力を發揮し、その功績によって一九二七年にイギリスから「サー」の称号を与えられている。

また地元のアチム＝アブアクワ国では教育の普及に力を入れ、特に王族の子供たちに教育を受けさせて王室の近代化を進めた。当時のアチム＝アブアクワ国は力カ才生産の中心

ロツパの金採掘会社で仕事をした後、アチム＝アブアクワ国の王室に秘書として抜擢される。そこで彼は、文盲であった当時の王に代わって、植民地政府や領内で操業する鉱山会社との交渉にあたった。

地であり、また金やダイヤモンドの採掘も活発におこなわれていた。そのため、これら経済活動の活発化に対応した実務能力、および植民地政府との交渉能力が、王室をつかさどる人々に欠かせない能力となっていたからである。またオフォリ¹アタ自身も、力才農場経営、ダイヤモンド採掘、輸出入業など幅広い商業活動をおこなっていた。伝統首長に依存した間接統治がすめられ、また国内の経済活動も急速に活発化していた植民地期において、卓越した英語力と実務経験を備えていたオフォリ²アタのような王の存在は、いわば時代が要請していたのだといえるかも知れない（ちなみに一九一〇年時点で、ゴールドコースト直轄領内の一九の伝統首長のうち、読み書きができる人物は二四人にすぎなかったという³）。

伝統首長と新興エリート層

一方、伝統首長層に一定の権力を認める間接統治の体制は、もなっていた。当時のある新聞は、伝統首長たちが「いわゆる間接統治の巧みな技法のなかで、州弁務官や地区弁務官の手中にある操り人形かチェスの駒」になっていると皮肉っている⁴。また植民地政府が立法審議会のメンバーとして伝統首長を重用していることに對し、別の新聞は次のように強く批判している。

「伝統首長たちは州評議會を組織し、自分たちのなかから選んだ人物を送り込むという姑息な手段で、立法府に裏口から入り込もうとしている。彼らは民衆の投票によって選ばれたのではない。わが民衆が選ぶとしたら、われわれの制度を台なしにする伝統首長を選ぶような、無分別な行動はとらないであろう」(『ゴールドコースト・タイムズ』紙一九二七年三月十五日付)。(5)

このような新興エリート層たちの主張は、植民地政府から「自然な指導者」(ナチュラル・リーダー)として重用されていた伝統首長層にとって、徐々に脅威となりつつあった。先のオフォリ・アタが王族の教育に特に力を入れていた背景には、文盲の伝統首長ではなく教育を受けたアフリカ人層こそが国の指導者となるべきだ、と主張する新興エリート層の台頭があつた。

現地社会の理解

伝統首長を中心とする既存の権力構造を利用して効果的に間接統治を進めるためには、現地社会の政治制度・文化・宗教・価値観などを理解することが不可欠になる。この点を重視した植民地政府は、ゴールドコースト諸社会の研究に力を入れるようになっていた。例えば沿岸部のゴールドコースト直轄領の地区副弁務官には、それぞれの担当地域の歴史と慣習に関する報告書の執筆が義務づけられた。現

地社会の理解のもとに、統治業務をおこなうことが奨励されたわけである。またアシヤンテイ⁽⁶⁾には人類学的研究の部局が設置され、その責任者であった人類学者ラトレイは、アシヤンテイの社会と文化に関する多くの研究報告を出版した。これら植民地政府による現地社会の研究成果は、間接統治を進める上で欠かせない知的基盤となっていた。

4 庶民にとつての植民地時代——小農とカカオ

小規模生産者が支えるカカオ

植民地時代に急速に拡大した輸出作物カカオの生産は、大規模プランテーションではなく小規模生産者によつておこなわれていた。当時のゴールドコースト中南部の森林地帯には、カカオ生産に適した未利用の土地が豊富にあつた。そのため南部沿岸地帯の農民たちは、カカオ生産のための土地を求めて各地に移住し、未開墾地を自ら切り開いて新たなカカオ畑を造成していった(コラム5参照)。教育もなく特別な技術も持たない農民にとつて、自らの労力だけで多くの現金収入を得られるカカオ生産は非常に魅力的なものであつた。植民地期末期のゴールド

コーストで唄われていた次のような流行歌には、当時の農民にとってカカオ生産がいかに重要だったかが端的にあらわれている。

♪子供を学校にやりたいなら、カカオ。

家を建てたいなら、カカオ。

結婚したいなら、カカオ。

服を買いたいなら、カカオ。

トラックを買いたいなら、カカオ。

この世界で何かしたいことがあるなら、

カカオ・マネーでやることさ。

「カカオは親族をこわす」

一方、急速に広がったカカオ生産は、農村社会に大きな変化をもたらしつつあった。樹木作物であるカカオは三〇年あま

りにわたって収穫できるため、一度できあがったカカオ畑からは長年にわたって現金収入が得られる。そのためカカオ畑の持ち主が死亡した際に、その畑を誰が相続するかについてのめめごとが、親族内部で頻繁に発生するようになった。後にガーナの大統領となるブシアはその著作の中で、農民のひとりが一九四〇年代に次のように語ったことを記録して

いる。

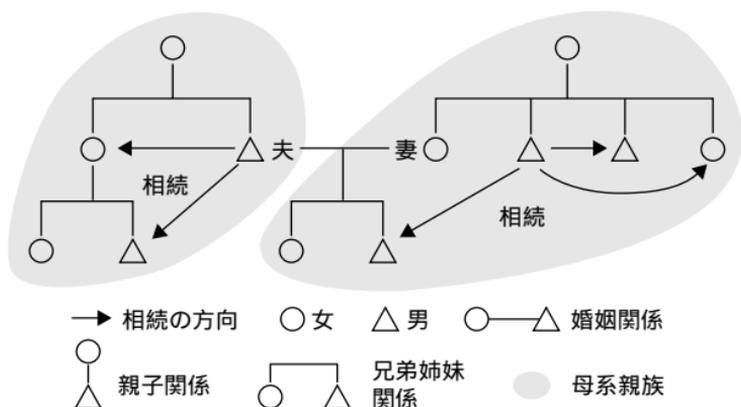
「カカオは親族をこわし、血縁関係をバラバラにしてしまつ⁽⁸⁾」。

カカオ、母系制、核家族

カカオ生産の拡大は、伝統的な相続制度にも変化をもたらした。カカオ生産がおこなわれているゴールドコースト南部に住む人々は、ほとんどが母系制をとっている。この母系制のもとでは女性を中心として親族が決まり、母を同じくする兄弟姉妹と姉妹の子供たちによって親族が形成される。この制度のもとでは、夫と妻は別々の親族に属し、父親とその子供も別々の親族に属する(図9)。したがって伝統的な母系制のもとでは、ある人物のカカオ畑は妻やその子供たちに相続されるのではなく、その人物の兄弟姉妹や姉妹の子供たちに相続される。

ところがカカオ畑の造成とそこでの農作業は、妻と子供たちの助けを借りておこなわれることが多い。特に、植民地時代に土地を求めて他の地域に移住してカカオ畑を作った移住農民は、故郷の親族から離れ、妻と子供たちでカカオ畑を造成していた。一方、そのようなカカオ畑に母系相続の原理が厳密に適用されると、父親が死んだ場合にその妻と子供たちは畑から追い出され、カカオ畑は遠くに住んでいる父親の母系親族(それまでカカオ畑での農作業をまったくしていなかった人たち)に相続されてしまつ。日本でも誰かが亡く

図9 母系親族と相続の方向



なると、それまで音信不通だった親戚が突如現れて遺産を持っていつてしまふ、という話はよくある。これと同じような現象が、この時代のゴールドコースト農村部でも頻繁におこっていたわけである。

戸主とその妻子を中心とする核家族が造成した力カ畑を、母系親族が相続すべきか、それとも妻や子供たちが相続すべきかの問題は、当時の伝統的指導者の間でも議論になっていた。アサンテの伝統首長たちはこの問題を一九三八年から議論しはじめており、一九四一年の伝統首長評議会では以下のような議論が戦わされている。

アサンテ王 ……子供たちやその母親は、家事や畑仕事でわれわれを助けている。(母系親族の)甥姪たちはまったく姿を見せず、世話をしてくれるのは子供たちだけ、ということさえある。

われわれのために尽くしてくれた子供たちやその母親に遺産を残し、われわれの死後に彼らが路頭に迷うことがないよう方策を講じるのは、正当なことではないか?……マンボン首長 難しい問題だ。われわれには確固とした伝統(母系相続制度)があり、寡婦や子供たちが故人の資産の一部を相続すべき、という裁定を下すことは適当でない。……

アサンテ王 私が言っているのは、伝統を変えるべきだということではない。忠実に仕えた妻と子供たちに対して考慮すべきだということだ。

マンボン首長 この問題については、わたしの地元でも議論を尽くしたが、満場一致で反対という結果になっている。……

オフィンズ首長 ……もし(妻と子供たちも相続すべきという)裁定が下されれば、間違いないく伝統を損ねることになる。また妻子と母系親族の間での訴訟が急増することになるだろう。

エジュス首長 寡婦と子供たちに対して何らかの考慮がなされるべきという考えを、個人的には支持する。しかしわれわれの相続法から見た場合、この問題をどうあつかうべきか苦慮するところだ。忠実に仕えた妻と子供たちに対して、父親は生前になんら

かの贈与をおこなうことができるはずだ。したがって、(死後の相続の権利を与えるという)案には反対する。⁽⁹⁾

結局この問題は、ある人物の私的な資産(つまり親族全体の所有物でないもの)であれば妻や子供たちに生前贈与することができる、という形で一九四二年に決着を見た。さらに四八年には、遺言なしの死亡の場合は私的資産の三分の一が妻と子供に残される、という裁定が伝統首長評議会でなされた。つまり、カカオ畑が個人の努力で取得され造成されたものであれば、妻と子供がその一部を相続できることとなったわけである。カカオ畑の帰属をめぐる当時のこのような動きの中には、「伝統」としての母系親族と、「現実」としての核家族が、庶民の生活の中で共存するようになっていたことがうかがえる。

コラム 5

カカオ農民、アジェイじいさんにとっての植民地時代⁽¹⁰⁾

わしの名はアジェイ。わしの故郷はずーっと東のボソという町だ(図10)。このペポアセ村に来てカカオを作り始めたのは、たしか一九五一年のことだったな。そのころ故郷のボソではカカオを作る土地がなくなってしまうたもんだから、こんな

へんぴなところまでやってきたってわけだ。ここにやってきた当初、あたりは全くのジャングルだった。ときどき象が、せつかく作った畑を荒らしていったものだ。

この辺の土地を手に入れたときは、故郷の知り合いや隣町の人たちと一〇人ぐらいのグループをつくってね、お金を集めてここの伝統的な首長さんから土地使用の許可を得たんだ。そのグループの名は「カンパニー」っていうんだ。当時、この辺には使われていない土地がいっぱいあってね、ずいぶん広い土地を手に入れることができたもんだ。

カカオっていうのはね、人の一生と同じように成長していくんだ。二十代

図10 ベボアセ村とボソ



の頃に親父から独立して、自分の力カオ畑を作り始めるだろ。そのあと力カオの樹が成長して収穫が十分とれるようになるまでには、一〇年もかかる。まあその間はイモやプランテンバナナもいっしょに作っているから、食うには全然困らないがなでもいっただん成長した力カオ畑からは、そのあと二〇年ぐらいはずっと収穫があるんだ。だから男盛りで現金が一番必要な頃には、まあそれなりの収入が得られるわけだ。ほんでその力カオの樹が年老いて収穫が少なくなってくる頃には、自分も年をとっていて、もう引退ってわけさ。わしももう年をとったし、そろそろ引退して故郷のボソに帰ることも考えないとな。

力カオはもうかかったか？昔はもうかかったな。わしがこの村に移住してきた一九五〇年頃は、力カオで家を何件も建てるほどもうけた人がざらにいたな。当時は土地がまだ豊富にあったから、広い力カオ畑を作ることができたし、それなりの収入もあった。わし自身も、故郷に家を一軒建てることできた。若いときに一生懸命自分の力カオ畑を大きくして、そのもうけで故郷に立派な家を建てて、老後は小作人に力カオ畑を任せて、自分は故郷に建てた家でのんびり暮らす、なんてことも当時はできたのさ。

5 庶民にとっての植民地時代——女性の経済活動

女性商人の進出

女性による商業活動が国内各地で活発化したのも、植民地時代のことであった。カカオ生産や金採掘など、国内で新たな産業が活発化してきた植民地時代、多くの男性たちはこれらの新しい仕事に積極的に関わるようになっていった。男性労働力がこれらの新たな産業に吸収されていく一方で、この時代の女性たちはそれまで男性の活動領域であった商業部門に積極的に参入するようになっていく。

一九二〇年代にトラック運転手と結婚した、アサンテ人女性の例を見てみよう。¹⁾彼女は一九二〇年代にトラックで移動するのに同行し、各地でヤムイモ（第5章「1 食べ物」参照）を買付けてそれをクマシで販売した。逆にクマシではヨーロッパの工業製品を買付け、それを夫のトラックで北部に持ち込み販売した。植民地時代に入って大量に輸入されるようになったヨーロッパ製品の存在、急速に進んだ国内交通網の整備、自動車の普及など、当時のゴールドコースト全体の状況変化が彼女の商業活動を支えていたのである。

もう一人、一九〇〇年生まれのアクラの女性商人の場合はこうである。

「私が母の商売を手伝うようになったのは、十二歳のころだったね。母と二人で魚の燻製やケンケ（トウモロコシ粉を蒸したものを）を作って近隣の村に売りに出かけたのさ。……私に子供が生まれる前は、（二五^キ先の）ンサワムまで歩いて行って魚を売って、一泊して帰ってくるようなこともしたね。週に二回行ったこともある。もうけは全部、母に渡した。彼女が私の衣食の面倒を見ていたからね。最初のころは、頭の上に魚を五〇尾のせて運ぶのがせいぜいだったけれど、慣れてくると三〇〇尾は運べたものさ。そのうちに列車が使えるようになると、クマシまで売りに出かけることもあったね。……行商に出かけるのは一週間に一度で、二日間帰らないこともあるし、一週間帰らないこともあった。一度なんか、一週間も行商したら魚が腐っちゃってね。雨が降ったもんだから虫がわいちゃったのさ。衛生検査官に五^リも罰金取られちゃったよ。……女にとって、仕事は大切だね。自分で食べて、身なりをきれいにして、必要な時はドレスアップする必要があるからね。もし働かなかったら、どうやって必要なものを買うことができるね？」⁽¹²⁾

このような女性商人の積極的な活動により、一九三〇年代から四〇年代になる頃には、商業活動の大半は女性の手によって担われるようになっていった。

カカオ、離婚、子育ての責任

カカオ畑をもつ夫が遺言なしで死亡した場合、妻が夫のカカオ畑の一部を相続できるようにはなつたことは先に述べた。しかしこれは、夫婦間の関係が良好で、婚姻関係が長く続いた場合のことである。離婚が頻繁におこなわれ、また社会的にも許容されるこの国では、良好な夫婦関係のもとで妻に夫の資産が分け与えられる、というケースばかりではない。特にカカオ生産が農村部で重要な現金収入源になってきた植民地時代には、夫のカカオ畑を手伝った妻に何の見返りも与えられなかったり、現金収入を手にした夫が衣食住や子供の教育費を負担しなかったりといったことが、妻の側から離婚を申し立てる際の十分な理由となつてきていた。このようなことが原因で離婚にいたつた場合、妻とその子供たちにカカオ畑が分け与えられるとは限らない。カカオ生産が急速に活発化した植民地時代を知るある女性は、次のように言っている。

「カカオを作るようになる以前も、(女たちは)夫を手伝つてキャツサバやプランテンバナナを作っていたよ。ただし自分たちが食べるためにね。売ろうとしても誰も買ってくれる人などいなかったから。……作つたものを自分たちで食べて終わりだった時代には、男が離婚を決めたなら、二人はそれぞれ別の道を行くことで何の問題もなかった。

でも妻が夫のカカオ畑を手伝うようになってからというものの、離婚すると（カカオ畑は夫のもので）妻には何の利益も残らない。つまり彼女は離婚するまでの間ずっと、意味のない仕事（夫のカカオ畑での仕事）をしてきたってわけだね⁽¹³⁾。

「意味のない仕事」に見切りをつけて離婚を選択した彼女たちは、子供を抱えたまま自分のカカオ畑を作り始めたり、行商をはじめたりして、自分自身で収入を得る努力をはじめた。植民地期に多くの女性が商業活動に参入してきた背景には、子供の養育の責任を背負い、自身が自由にできる収入源を確保しようとする、多くの女性たちの存在があったのかもしれない。

6 農村部での政治運動——カカオ不売運動⁽¹⁴⁾

ヨーロッパ企業による カカオ輸出独占

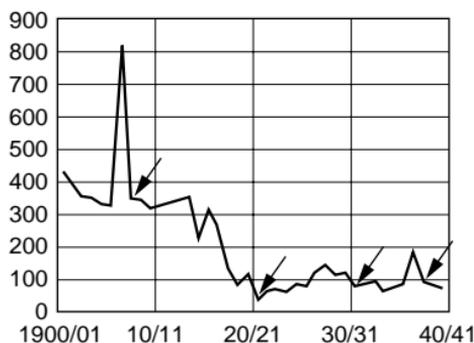
ゴールドコーストの住民にとって、カカオ生産が重要な収入源となっていたことはすでに見たとおりである。しかしカカオの輸出に関しては、そのほとんどがヨーロッパ企業によって支配

されていた。また国内でのカカオの買付け価格は、国際市場での価格変動を反映して年ごと大きく上下していた。そのため一九〇〇年代から三〇年代にかけてのゴールドコーストでは、低いカカオの買付け価格と外国企業による輸出の独占に抗議して、生産者が組織的にカカオの販売を拒否する不売運動が頻発した。

頻発したカカオ不売運動の中でも特に大規模だったのが、一九三七年十一月から翌年四月まで続いた不売運動である。この運動の引き金となったのは、カカオ国際価格の低下を背景に、ヨーロッパ企業の間で締結された買付け協定であった。この協定の目的は、買付け割当をあらかじめ決めることによって新規企業の参入を制限し、また買付け価格を企業間で統一することによって各企業がカカオ輸出から利益を確保できるようにすることであった。

この協定締結の動きが明らかになると、ゴールドコーストでは各地で協定反対の動きが急速に拡大した。ゴールドコースト直轄領の各地では生産者代表による会議が開催され、カカオの不売運動とヨーロッパからの輸入品の不買運動が決議された。またアシャンティでも農民同盟が結成され、同様の運動を決議するために集会が開催された。不売運動は一九三八年四月に協定の一時的停止が合意されるまで続き、この結果十一月から四月までの期

図11 カカオの実質生産者価格の推移
(1963/64年度=100)



(注) (1)矢印は不売運動があった年。(2)年度は10月～9月。

間のカカオ輸出量は、前年同期間の一九%にまで激減した。

不売運動の背景

これらのカカオ不売運動の背景には、当時のカカオ流通に特徴的な二つの要因が存在していた。そのひとつは、カカオの低価格に対する生

産者の不満である。カカオの国際価格は年ごとの変動が激しく、一連のカカオ不売運動は、その結果国内での買付け価格も引き下げられた時期

に発生した(図11)。これらの価格低下に対する生産者一般の不満が、広範囲に拡大したカカオ不売運動の大きな原因であった。

二つめは、カカオの買付けを支配するヨーロッパ企業に対する、大農層およびアフリカ人商人層の不満である。不売運動を指揮してヨーロッパ企業や植民地政府との交渉にあたったのがこの層であり、彼らの関心はヨーロッパ企業が支配するカカオ流通に参入して経済的利益を上げることであつた。特に一九三七年の不売運動では、買付け

価格とともに買付け量をも外国企業間であらかじめ割り当ててることを取り決めた協定に対して批判が強まった。この買付け割り当ては、外国企業の既得権益と流通支配を保護する意図で合意されたものである。そのためこの内容に対しては、アフリカ人商人層および伝統首長（自らが大農でありかつ仲買人としてカカオ流通に関わっていることが多い）が強く反発した。

伝統首長と不売運動

カカオ不売運動の拡大に際しては、各地の伝統首長たちが持つていた政治的権力が大きな役割を果たした。たとえば一九二一年の不売運動では、イースタン州各地の首長たちがカカオ販売を禁止する布告を出し、他地域から運ばれるカカオが通過することも禁じて違反者には罰金を科す伝統首長もあらわれた。一九三七年の不売運動の際にも、セントラル州で開催された農民と伝統首長の合同会議では、カカオ不売とヨーロッパ製品不買の布告が伝統首長によってなされた。これら伝統首長による布告に背いた者は、拘束されたり罰金を科されたりした。各地の首長たちは伝統的権力にもとづいた命令力を持っており、これを不売運動の強制に使用したのだった。

植民地政府の対応

このようにカカオ不売運動は、各地の伝統首長による命令とその強制によって維持された側面が大きい。そしてそのような伝統首長の

政治的権力を容認し、むしろ支援したのは植民地政府であつた。すでに述べたように、ゴールドコーストにおけるイギリスの植民地統治は、土着の政治機構を最大限利用する間接統治を基本として進められた。そのような政策のなかで伝統首長は、地方統治に関して植民地政府から一定の権限を与えられており、植民地の間接統治制度の枠内でその政治的権力が確立されていた。カカオ不売運動においては、伝統首長がこの政治的権力を運動の命令・維持および違反者の制裁に利用した側面が大きい。

これに対して植民地政府は、不売運動の拡大に対して中立的な立場を取ることを公言しつつ、不売運動を強制した地方の伝統首長らを取り締まった。例えば一九三〇年十二月、アシャンティでは不売運動を命令した伝統首長の一人が逮捕された。別の場所では伝統首長の側近が運動の命令に関与した罪で一カ月間投獄され、不売運動解除の命令を出すことを拒否した伝統首長自身も拘束された。植民地支配における地方統治を効率的におこなうために一定の権限を伝統首長に与えつつ、彼らが植民地の安定をおびやかす行動に出た場合にはこれを取り締まるという方策を、この時期の植民地政府はとっていたのである。

7 独立運動の高まり

都市部での反政府 機運の高まり

第二次世界大戦後の一九四〇年代後半になると、ゴールドコーストでは植民地政府に対する反感が都市部と農村部の両方で急速に高まり、独立に向けた政治運動が活発におこなわれた。都市部では、物価の上昇と失業者の増大が庶民の不満を募らせていた。物価上昇の背景には、輸入生活必需品の流通が外国企業によって支配されており、その輸入量に関してはヨーロッパ企業の組織する西アフリカ貿易商協会が輸入割当制をしていた事実があった。また大戦終結に伴って約五万人の帰還兵が国内に流入し、都市部の物価上昇と失業問題をさらに悪化させていた。そのため一九四八年一月には、輸入品の高騰に抗議して大規模な輸入品不買運動が都市部で拡大し、二月には主要都市で暴動が発生する事態にまで発展した。

農村部での反政府 気運の高まり

時期を同じくして農村部でも、反政府機運は高まっていた。第二次大戦の勃発後、植民地政府はカカオの価格変動を避けるために国内での買上価格を設定していた。しかし買上価格は低く抑えられてお

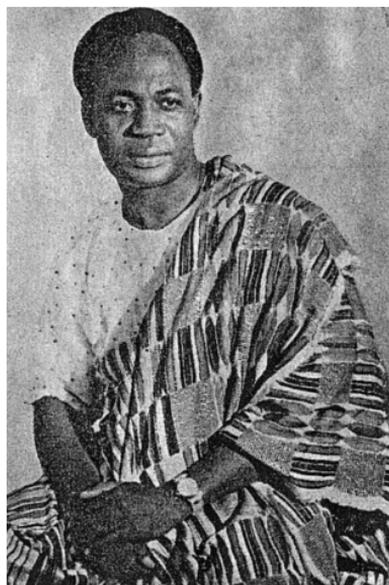
り、この時期の輸入品をはじめとする物価の上昇は農村部の住民に深刻な影響を与えていた。加えて一九四七年から四八年には、植民地政府が病害の拡大を防ぐために病気の力カ才樹を農民の意志に関係なく強制的に伐採する対策を開始し、これに反対する農民の活動が活発化した。低く設定された力カ才の生産者価格、物価の高騰、力カ才樹の強制伐採などの諸要因が重なり、この時期の農村部でも植民地政府に対する不信感が大きく高まった。

政党の結成

国内での不満の高まりを背景に、この時期に政党結成の動きが植民地内で活発化した。まず一九四七年八月、独立政府の実現を目的として「ゴールドコースト初の政党」「統一ゴールドコースト会議」が設立された。同年末には後に国家元首となるンクルマ（写真⑥）が帰国して連合ゴールドコースト会議の事務局長に就任した。彼はその後、漸進的な独立を目指す連合ゴールドコースト会議から離脱し、即時独立を主張する新政党の「会議人民党」を一九四九年に結成した。

ベランダ・ボイス

会議人民党は設立当初、「ベランダ・ボイス」という言葉に象徴される庶民層を中心に支持を獲得していた。ベランダ・ボイスとは、金持ちの家の使い走りとして雇われ、主人宅のベランダで寝泊まりするような低所



写真⑥ ガーナ独立の父、ンクルマ

党であつた。いずれの政党もイギリスからの独立を目指して結成されたのだが、その支持基盤には大きな違いがあつたわけである（コラム6）。

ンクルマ時代の開始 とガーナ独立

イギリス政府は一九四八年、ゴールドコーストでの暴動や外国製品不買運動の背景を調査する調査団を派遣した。その後ゴールドコーストでは、この調査団の提言に従つてアフリカ人主体の立法議会と行政審議会を設置する新憲法が制定され、これに基づく立法議会選挙が一九五一年

得者層の若者のことを指す。つまり教育も資産も特権もなく、日々の生活に精一杯の多くの庶民層の姿を象徴するのがベランダ・ボーイズであつた。会議人民党の幹部はこの言葉を好んで使い、自分たちが庶民の代表であることを強調していた。他方、ンクルマが離脱した連合ゴールドコースト会議は、当時のエリート層と富裕層を中心として構成されていた政

におこなわれた。会議人民党はこの選挙で勝利し、党首ンクルマはその後首相に就任した。これにより、最終的な政治権限はゴールドコースト総督の手中にあったものの、実質的にはンクルマと会議人民党が国内の政権を担うことになった。会議人民党はその後、一九五四年と五六年におこなわれた選挙でも大勝する。そして一九五七年三月六日、植民地ゴールドコーストは独立国家ガーナとして新たなスタートを遂げ、ンクルマは初代首相に就任した。

サハラ以南アフリカの植民地で最初の独立を遂げたガーナは、当時世界中の注目を集めたアフリカの希望の星であった。独立の日、イギリス植民地相は以下のようなメッセージをンクルマ首相に贈っている。

「独立に際し、あなたとガーナ国民のみなさんに最大限のお祝いの言葉をお贈りできることを大変光栄に思います。……数週間前にガーナを訪問する機会があつたことは、私にとって大変良い経験でした。貴国の大臣や政治指導者の方々とともにあなたと会談するなかで、みなさんが過去の対立を克服し、独立という新たな責任と機会に対して、調和と真摯な態度をもって臨まれていることに大変な感銘を受けました。その精神を今後長きにわたって継続されるならば、あなたの賢明な指導力のもと、ガーナの未来は明

るいものであることを確信しております。……」⁽¹⁵⁾。
アフリカ大陸中を独立の歓喜で湧かせ、未来への希望の象徴であったガーナ独立。しかしその後の独立ガーナの歩みは、皮肉にも新興アフリカ諸国の開発と国家建設の困難さを見せつける象徴ともなっていた。次章では、そんなガーナの独立後の歩みを見ていくことにしよう。

若き日のンクルマ⁽¹⁶⁾

ガーナ独立の父ンクルマは、一九〇九年頃の九月、ガーナ西部の海岸に近いンクロフルという村で生まれた。生まれたときの彼はほとんど動かなかったため、母親は赤ん坊が死んでいるのだと思った。しかし周りにいた親戚の女の子たちが、赤ん坊を揺らしたり、楽器を鳴らしたり、口にバナナをつっこんだりして息をさせようとしたところ、やっと赤ん坊は大声で泣き出したという。

ンクルマは三歳の時に母に連れられ、金細工職人であった父のいるコートジボワール国境沿いの町に移り、そのミッシヨン系学校で八年間の教育を受けた。卒業後その地で教師をしていた時に、たまたま学校を訪問中の政府訓練学校（後

コラム 6

のアチモタ・カレッジ)の校長の目にとまり、首都アクラで高等教育を受ける機会を得た。その後アクラに移ってまもなく父を亡くしたため、貧乏学生であった彼は夏休みにも家に帰らず、学費を稼ぐために寮にとどまって草刈りなどの仕事をし
て働いたという。

カレッジ卒業後しばらくは故郷の近くで教師をしていた青年シムラだったが、
大学教育を受けるためにアメリカに渡ることを決意する。リンカーン大学から入学
許可を得た彼は、渡航費を援助してくれそうな親戚を訪ねるために無賃乗船でナイ
ジェリアのラゴスに渡航し、なんとかアメリカ行き船賃に足りるような援助を得
て一九三五年に渡米を実現する。その後彼はアメリカで一〇年を過ごし、学部卒業
後はリンカーン大学で教鞭を取りながらペンシルバニア大学大学院に学び、教育学
と哲学の修士号を取得した。

彼はリンカーン大学で奨学金を得たものの、経済的には苦しい生活を強いられて
いた。特に夏休み中は大学の寮にとどまることが許されなかったため、身を寄せる
場所のない彼は、終夜運転のニューヨークの地下鉄に乗って夜を明かした時期も
あったという。苦学生シムラはその後南米行きの船に乗り込み、皿洗いやウエイ
ターをして生活費を稼いだ。夏休み期間中に泊まるところのない彼にとって、泊ま

り込みのこの仕事为好都合だったからである。それになによりも、「給料もそこそこで、日に三回まともな食事が保証される」のが魅力的だったと、彼自身が回想している。苦学生生活はその後も続き、彼がリンカーン大学を卒業した際には、大学への支払金未納のために学位授与が遅れたりしたらしい。

ガーナ帰国後の独立運動で庶民に訴える会議人民党を結成し、エリート層や富裕層の政治家たちと一線を画した彼の思想の背景には、苦学生だった若い頃の自分自身の体験が大きく影響していたのかもしれない。

注(1) Hill, Polly, *The Migrant Cocoa Farmers of Southern Ghana: A Study in Rural Capitalism*, Cambridge: Cambridge University Press, 1963, p.235 以下。

(2) Rathbone, Richard, *Murder and Politics in Colonial Ghana*, New Haven and London: Yale University Press, 1993, pp.21-67 以下。

(3) Kimble, David, *A Political History of Ghana: The Rise of Gold Coast Nationalism 1850-1928*, Oxford: Clarendon Press, 1963, p.470 以下。

- (4) 『ゴールドコースト・インデペンデント』紙 一九一九年三月十五日付(同右書 p.475)に再掲)。
- (5) Kimble, *A Political History*..., p.493 に再掲。
- (6) 「アシャンティ」は「アサnten」の英語読みである。植民地統治以降、行政上の正式名には「アシャンティ」が使われている。本書では行政上の名称には「アシャンティ」を、王国やそこに住む人々には「アサnten」を使う。
- (7) サーポン (Fred Sarpong) 作詞のハイライフ・ソング。Austin, Dennis, *Politics in Ghana, 1946-1960*, London, New York and Toronto: Oxford University Press, 1964, p.275 に掲載。
- (8) Busia, Kofi, *The Position of the Chief in the Modern Political System of Ashanti: A Study of the Influence of Contemporary Social Changes on Ashanti Political Institutions*, London: Oxford University Press, 1951, p.127.
- (9) 同右書 (pp.125-126) に再掲された、評議会の議事録から抜粋。かつこ内は筆者(高根)の補足。
- (10) 一九九六年、ベポアセ村で筆者がおこなった調査の際に聞いた、アジェイじいさんの回想を再構成したもの。
- (11) Clark, Gracia, *Onions Are My Husband: Survival and Accumulation by West African Market*

Women, Chicago: University of Chicago Press, 1994, pp.318-321 以下。

- (12) アキラの女性商人ソロモン (Mary Koko Solomon) の語 (Robertson, Claire C., *Sharing the Same Bowl: A Socioeconomic History of Women and Class in Accra, Ghana*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 1990 (1984), pp.73-74 以下)。
- (13) Allman, J. and V. Tashjian, "I Will Not Eat Stone": A *Women's History of Colonial Asante*, Portsmouth: Heinemann, 2000, p.142 以下。以下は筆者(高根)の補足。
- (14) 以下は、筆者がおこなったガーナ国立公文書館での史料調査にもとづく。
- (15) Rathborne, Richard, *British Documents on the End of Empire: Ghana, Part II 1952-1957*, London: HMSO, 1992, pp.417-418 以下。
- (16) ンクルム・ヌマ・クワメの回想録 (Nkrumah, Kwame, *The Autobiography of Kwame Nkrumah*, Edinburgh: Thomas Nelson and Sons, 1959 (1960)) 以下。